

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

それは、机の上の小さな虹である。色鉛筆。父がつくった私の勉強机は、板の残りを利用した、引き出しもなければ飾りもない、ただの机だった。

しかし、ニスだけはいいねいにぬって、明るい茶色をしていた。はじめてもらう自分の机である。壁ぎわに押しつけ、何を置こうか①ひと思案した。小学校の三年か四年生ごろだったろうか。それまでは机らしいものは持たなかった。縁側が、机の用をしていた。

母が所用で東京へ出かけるのは二、三か月に一度くらいの割合だったが、そのたび私は学用品をねだった。セルロイド（※プラスチックの一種）の筆箱、紙ばさみ、鉛筆、クレヨン、下敷き。どれもこれも宝ものであった。わけても筆箱は、每晚抱いて寝たいほど気に入っていた。机のない時代はそれら私の財産を、夜は枕元に並べて、眺め入りながら眠りについたものだ。

②あたらしい机の上に、私はまず、筆箱を置いた。淡いピンクのセルロイドがバラの花のように光った。十銭屋で買ったビーズのお財布ものせてみた。南京玉の指輪もひとつ。赤と白の玉が交互につながったもの。水色の石けりの石。

③机を持った日から、私はすこしおとなになった。ある時、東京から帰った母は、十二色の色鉛筆をその机の上に置いた。ブリキの薄型の箱におさまった十二色の色鉛筆は、神々しいまでに美しかった。私の小さな机にはじめて虹が立った。

○ 私より少し年下の女友だちに聞いてみた。私は※動員学徒世代、彼女は学童疎開世代である。しかし共通しているのは、④そのものが宝ものであり、わけても色鉛筆は、ぜいたくのひとつの極だったという思いである。色鉛筆にまつわる話を聞かせて、という彼女は一瞬、声をときらせ、やがてこういった。

「それは、私の恥を話すことになるの」
学童疎開で、家を離れる前日、小学校四年生だった彼女は、オルガンの先生にお別れを言いに行った。先生の一家はクリスチャンで、当時身をひそめるように暮らしていたが、オルガンを通して人々とかたく結ばれていた。神学校の生徒だったその先生は、お別れをいう彼女にプレゼントを下さった。スイス製の、十二色の色鉛筆だった。

※動員学徒Ⅱ第二次世界大戦中に労働力不足を補うために強制的に労働に従事させられた中学校以上の生徒

※は出題者注

問一 ①「ひと思案した」の意味を次から選びなさい。

- ア しばしあれこれ考えた イ ひとなみに想像した
ウ 一つのこと集中した エ 軽く思いを寄せた

問二 ②「あたらしい机の上に、私はまず、筆箱を置いた」のはなぜか、その理由として最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 引き出しも飾りもないそまつな机が恥ずかしかったから
イ 真新しい机には新しい筆箱がよく似合うと思ったから
ウ 初めてもらった机をお気に入りでいるどりたかったから
エ すてきな筆箱を持っていることをみんなに見てほしかったから

問三 ③「机を持った日から、私はすこしおとなになった」とありますが、この時の「私」の気持ちとして最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 大切な自分の財産をすべて並べられることが誇らしい気持ち
イ 縁側という子ども遊び場から離れてせいせいする気持ち
ウ 本格的に勉強に取り組む年齢になったことを自覚し緊張する気持ち
エ 自分の自由にできる空間を初めて手に入れてうれしい気持ち

問四 (④)にあてはまる言葉を本文中から三字で抜き出さない。

- 問五 ⑤「自分を泥棒のように思い、それでも、とうとう、色鉛筆をかくし通してしまっただけです」とありますが、
(1) 色鉛筆は自分のもののなのに、という点が「泥棒のよう」なのか、説明しなさい。
(2) 自分を泥棒のように思いながらも、女友だちが色鉛筆をかくし通したのはなぜですか。ていねいに説明しなさい。

「りんご箱の一番下にその色鉛筆を入れて、疎開先へ行ったのですが、もうノート一冊、鉛筆一本、自由には買えない時代になっていたでしよ、疎開先で先生は私たちに、持ってきたものは全部出して、ノートも鉛筆も、みんなで使うようにしましょう、とおっしゃったの。何でも共用。そうやって助け合いましたよって……」

生徒たちは素直だった。持ちものは全部、着るものは別にしても、供出し、わけあって使った。

「でも……。私はオルガンの先生からいただいた十二色の色鉛筆を、どうしても、りんご箱の底からとり出すことが出来なかった。かくして出さなかった。あんなにきれいな色鉛筆。はじめての色鉛筆でした。ほんとうは出さなければいけない、でも出したくない。毎日、私は⑤自分を泥棒のように思い、それでも、とうとう、色鉛筆をかくし通してしまっただけです」

その疎開先の食糧事情が極端に悪くなり、彼女たちは両親のもとへ再び帰されることになった。りんご箱に身のまわりのものを詰め、親元へ、送ってもらう手はずになった。

「けれども、とうとう、色鉛筆の入ったりんご箱は、戻らなかったのです。どこへどう消えたのか。そのとき私は、色鉛筆を約束を破ってかくした罪の、これが天罰なのだ、⑥からだ中青ざめるほどのショックを受けました」

一度も使わない色鉛筆だった。彼女の虹は、はかなく消えてしまい、約束を守らなかった、裏切り者という恥の記憶が、以後、消え難くしみついたのだという。

○ 色鉛筆の虹を抱きしめて深く傷ついた私の女友だち。偶然、何年前、彼女の誕生日に私は色鉛筆をおくったことがある。絵を描くのが好きなひとだからである。⑦知らず、傷にふれていたことになる。

机の上に、色鉛筆。⑧戦後三十七年目の夏。絵を描こうという気持ちからでもなく、あれば机の上がはなやぐだろうと思って、色鉛筆を買った。ゆたかになって誰も、色鉛筆を宝と思わなくなった。しかし、⑨私にはやはり虹であり、宝のひとつである。さんらん（※美しくかがやく）の虹である。そして虹はいかにも消えやすい。この虹を再び失いたくない思いは誰よりも強くある。⑩戦中派の心模様である。

(増田れい子「インク壺」所収「色鉛筆」)

問六 ⑥「からだ中青ざめるほどのショックを受けました」とありますが、この時の女友だちの気持ちとして最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 約束を破ってまで手放したくなかった色鉛筆が、永遠に失われてしまったことを悲しく思う気持ち
イ たまたま手に入れたとても高級な色鉛筆を、一度も使用することなく奪われてしまったくやしい気持ち
ウ 自分の罪が実は誰かに知られていたのだということに気づき、恥ずかしさのあまりぼうぜんとする気持ち
エ みんなで協力し合って生きようとしていた人々を裏切った罪を、目の前に突きつけられたような苦しい気持ち

問七 ⑦「知らず、傷にふれていたことになる」とありますが、

- (1) 「知らず」のここでの意味として最も適切なものを次から選びなさい。
ア 思い出せず イ 気づかないうちに
ウ 関わりはないが エ わきまもなく
(2) 「傷」とは何をさしていますか。本文から二十字程度で抜き出し、最初と最後の三字を書きなさい。

問八 ⑧「戦後」とありますが、この戦争は何年に終わったか、西暦で書きなさい。

問九 ⑨「私にはやはり虹であり」とありますが、色鉛筆は「私」にとつてどのようなものですか。「虹」という言葉に着目して答えなさい。

問十 ⑩「戦中派の心模様である」とありますが、筆者の心模様として最も適切なものを次から選びなさい。
ア 最近の人たちに、戦時中のように物を大切にすることを受けついでほしい
イ 戦時中とは異なり、好きなものをだいにできる世の中であり続けてほしい
ウ 戦時中と比べて物に困ることのない豊かな生活を二度と手放したくない
エ 戦時中の学校生活のように先生の言いつけが絶対であるべきではない
オ 子どもの心を傷つける戦時中の学童疎開のようなことはあってはならない

二一 アイヌの文化の「カムイ」について述べた次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

水のカムイ

水に対する見方も面白い。炎が火のカムイの衣裳であるように、水は水のカムイの衣裳である。夜、水を汲む時の呪文としてこんな言葉がある。

ワツカ モーシモシ。 ワツカ カプカラ クス ケクナー。
wakka mos mos wakka kapkar kusu k=ek na。
「水よ起きてください。水のお着物を①いただきにまいりましたよ」。

カムイというのは人間と同じように生活しているものと考えられているので、水もまた夜になれば眠る。だから、夜、川へ水を汲みにいって、いきなり手桶を突っ込んだりしたら、びっくりして飛び起きて水がにごってしまう。だから、まず声をかけて水のカムイを起こし、それから表面の着物の部分をそつといただいてくれるのである。水を汲む仕事というのは女性の仕事であり、こんなふうには夜aリンジに汲んでこせられるのは子供の役目だろうから、女の子が行かされることが多かっただろう。夜の闇の中で心細く、「水の神様目をさまして私を守ってください」という気持ちも働いたかもしれない。そうやって呪文を唱えながら水を汲むことで、すべてのものに精神の働きを見えるという気持ちだが、知らず知らずのうちに育てられていったのに違いない。

自然に対する②こうした見方は、現代人の目には単なる迷信としてしか映らないかもしれないが、非常に合理的な側面を持っている。水に精神があるものと見、その着物をそつといただいてくるという気持ちで水を汲めば、桶を乱暴に水に突っ込むようなこともなくなり、間違いくなく水を濁さずに汲むことができるのだ。

それはまた川で洗濯をしないという習慣にも現れる。ふんだんに水の流れる川のそばで生活しながら、そこで洗濯をしない民族というのも珍しいのではないかと思うが、アイヌ人にとっては川にも精神があるのであり、それは人間と同じ感覚を持っている。人間にとつて汚いものは川にとつても汚いのである。(A)、汚れたものを川に流すなどということはしない。③そういう気持ちで以て、川で洗濯することも、川に向

のだそうだ。そこで洋一少年は何にそのお餅を乗せたらよいのかわからないながら納屋へ行き、これも神様かな、あれも神様かなと考えつつ、馬のcジリヨウ桶やら、農器具やら、自転車やらにそのお供え餅を乗せて戻ってくる。すると、おばあさんはばらくしてから納屋へ見にいき、洋一少年が何にお供えしてきたか確認して、⑤ニコニコして戻ってきたというのである。これは学校に上がる前から小学校の中ぐらいまで続いた習慣だというが、これによつて道具にも魂があつて、自分もその世話になつていくという観念を、自然に体で覚えさせられたと大谷氏はいう。

農器具やら自転車やらもまたカムイであるとするならば、現代の都会生活の中でもカムイの観念を生かし、アイヌの伝統的な精神に即した生活をするのは、不可能ではないはずだ。かつては和人だとて、自分の使う道具などに対しては⑥同じような気持ちを抱いて生活していたはずである。私自身も子供の頃には、⑦はきふるしてよれよれになった靴でさえ愛着があつて、捨てずに飾つておいた覚えがある。あの時の気持ちはどういうものであつたか明確には思い出せないが、もしかしたらそれがかつてのアイヌ的精神と同じものであつたかもしれない。それがいまや、そんなことを言っている私自身が、狭い家の中にもものばかりあふれかえっている生活を送り、邪魔臭くなるとどんどん捨ててしまつていく。私自身は日本の伝統文化もアイヌの伝統文化も昭和四〇年代の高度成長期に壊滅的なダメージを受けたと考えているのだが、それは物質的な生活が豊かになることによつてももの精神性が失われ、⑧ものがものとしてしかとらえられなくなつてきたからではあるまいか。そう考えると、⑨カムイという観念を見つめることによつて、われわれが本来そうであつたはずの精神にわれわれ自身を戻すということが、できるのではないかという気がするのである。

(中川裕『アイヌ語をフィールドワークする』より)

II 「アイヌ文化のキーワード 1 カムイ」

かつて立ち小便することもきつくいましめられるのであるが、それはもちろん必然的に下流に住む人々の飲み水を汚さないということにつながる。伝染病の蔓延をふせぐことにももちろんつながる。水を人と同じものと見るといことが、社会生活を快適に営むための、こうした非常に合理的なシステムを支えているのである。さて、それではかつてのアイヌ人は洗濯する時にどうやっていたのかというと、水を樽に汲んで、その樽で洗濯をしたのだつた。(B)、樽で洗うにしたつてなんにしたつて、④汚れ水は必ず出る。その水はどうしたのかということはやはり疑問になるので、あるとき白沢ナベさんに聞いてみたことがあつた。(C)、カムイのいないところに捨てるんだという。しかし、カムイのいないところといったつて、それこそありとあらゆるものがカムイなのだから、いないところなんてないんじゃないのと同じ聞き返したら、「だからそういうときは、『これから水をまかす(捨てる)』から、カムイがいたらちよつとそこをどいてください」といって、それからまかすのさ」ということであつた。

あらゆるものが人間と同じ

身の回りのあらゆるものに人間と同じ感情を見出すというこうした発想こそ、アイヌ文化のbコンテイをなすものである。⑥よくアイヌ文化について「自然との共存」とか「自然との調和」といった言い方を(自分でもときどき)するが、それは①キャッチフレーズのわかりやすく言っているのであつて、アイヌ文化の特質をもう少し正確に言えば、「この世を動かしているすべてのものに人間と同じ精神の働きを認め、それらが人間と同じルールにしたがつて、人間とともにひとつの共同社会を形成しているという思想に基づいた文化」ということになるうか。

だから、なにも自然物ばかりに敬意を払うわけではない。(D)物であっても、それが人間の役に立つてくれればピリカカムイ piri'a kamuy「善神」なのであり、人間に害を及ぼせばウエンカムイ wen kamuy「悪神」ということになる。

穂別町出身の大谷洋一氏は昭和三五年生まれで私よりも年が若いのだが、彼からこんな話を聞いたことがある。子供の頃、暮れになると家族で餅つきをするのだが(これはもちろん和人の習慣)、そこで作った小さなお供え餅をおばあさんが洋一少年に持たせて、「お前が世話になつたなと思つている神様に、これをあげておいで」という

問一 ―①「いただきにまいりました」について、

(1) 敬語の説明として最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 尊敬語と謙譲語が使われている
イ 謙譲語と丁寧語が使われている
ウ 丁寧語と尊敬語が使われている
エ 尊敬語と謙譲語と丁寧語が使われている
(2) 敬語を使わない、ふつうの言い方に直しなさい。

問二 ―②について、

- (1) 「迷信」の意味として最も適切なものを次から選びなさい。
ア 道理に合わない言い伝え イ 人々を混乱させるたくらみ
ウ 明確ではない考え方 エ ひとりよがりの思いこみ
(2) 「非常に合理的な側面を持つている」とありますが、「こうした見方」はどのような合理的な結果をもたらしていますか。本文中から十字～二十字で三抜き出しなさい。

問三 (A) (C) にあてはまる語をそれぞれ選びなさい。

ア つまり イ また ウ しかし エ すると オ だから

問四 ―③「そういう気持ちで以て」とありますが、どういうことを大切にしている気持ちですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 神を尊いものとして敬う イ 相手の立場に立つて考える
ウ まちがったらず改める エ 集団生活のルールを守る

問五 ―④「汚れ水は必ず出る」とありますが、アイヌの人は、汚れ水をどこに捨てるのですか。次の() に十五字～二十字の語句を入れて、説明を完成させなさい。

カムイのいないところはないので、() 場所

問六 ― ㉔「よく・㉕」 「キャッチフレーズの」のここでの意味として最も適切なものをそれぞれ選びなさい。

- ㉔ 「よく」
- ア たくみに イ たやすく
ウ みごとに エ しばしば
- ㉕ 「キャッチフレーズの」
- ア イメージが定まった印象的な言葉で
イ 今現在流行しているはでな言葉で
ウ 以前から使い古された言葉で
エ 強い主張をこめたりつばな言葉で

問七 (D) にあてはまる漢字二字の熟語を考えて書きなさい。

問八 ― ㉖「ニコニコして戻ってきた」とありますが、おばあさんはなぜニコニコして戻ってきたのですか。その理由として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 洋一少年が道具にまで餅を供える優しさを持つことがうれしかったから
イ 洋一少年が予想外に様々なものに餅をお供えしていることが面白かったから
ウ 洋一少年が自分なりに考えて餅をお供えできていたことに満足したから
エ 洋一少年が納屋であれこれ悩んだあとが見えることがほえましかったから

問九 ― ㉗「同じような気持ち」とはどのような気持ちか、最もあてはまらないものを次から選びなさい。

- ア 自分のために働いてくれたという感謝の気持ち
イ ずつとそばにあったものへの親しい気持ち
ウ 役に立つので手放せないという愛着の気持ち
エ 生活を支えてくれたものへの謙虚な気持ち

問十四 次の意味になるように () にあてはまる言葉をひらがなで書きなさい。

- 1 じやまをする ↓ 水を ()
2 なかったことにする ↓ 水に ()

問十五 [a] 「リンジ」・[b] 「コンテイ」・[c] 「シリョウ」を漢字に直しなさい。

問十 ― ㉘「はきふるしてよれよれになった靴でさえ」とありますが、この「さえ」と同じ働きの「さえ」を次から選びなさい。

- ア 自然の恵みだと思えば、長い雨さえありがたく感じる。
イ 台風で、風に続いて雨さえ本格的になってきた。
ウ 強い雨さえ降らなければ、明日の遠足は決行です。
エ 気温が低いうえ、雨さえも降る寒い夜だった。

問十一 ― ㉙「ものがものとしてしかとらえられなくなってきた」とありますが、このことによって現代人はどのような行動をとると筆者は考えていますか。十字程度で答えなさい。

問十二 ― ㉚「カムイという観念」とはどういう考え方ですか。本文から読み取って説明しなさい。

問十三 次の1～4のうち、本文の内容と合っているものには○を、間違っているものには×をつけなさい。

- 1 アイヌの人たちは、他の文化の影響を受けず、アイヌの文化だけを守り続けている。
2 カムイとはこの世の全てのものに宿っており、どれも人間の役に立ってくれる存在である。
3 アイヌの人たちは、いつもカムイを感じているが、人間からカムイに働きかけることはない。
4 カムイと共に生きる精神を生かして生活することは、アイヌ以外の人にもよいことだ。

三 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 外に出て日光をアびる。
2 長々しい説明をハブく。
3 出番を待ちカマえる。
4 山のイタダキに雪が残る。

